

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23520082

研究課題名(和文)「もの」と「場所」の霊性の生成に関する宗教人類学的研究

研究課題名(英文)Religious Anthropological Study on generation of Spirituality in Things and Places

研究代表者

長谷 千代子(Nagatani, Chiyoko)

九州大学・比較社会文化研究科(研究院)・准教授

研究者番号：20450207

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：現在中国では、宗教的な活動や慣習の意味が問い直されている。本研究では、主に中国における宗教についてのとらえ方の現代的変化を、聖性の在り方そのものと聖性が現れる「場所」や「もの」の在り方の具体的な変化をとおして明らかにしようとした。その結果分かったのは、政治的には宗教活動場所を特定の場所に限定しようとする力が働く一方で、そうした場所での活動に飽き足らなくなった人々が新たな活動場所を作ったり、世俗的な生活そのものを宗教的な修業の場として読み替えたりして、伝統的なものとは異なる聖なる場所を創造していることだった。

研究成果の概要(英文)：In China today, religion and religious customs have been reevaluated. This study aimed to clarify how people's and the officials' view for religion has been changing through positive research about how people treat religious things and religious places. the research revealed that there exists strong political power to restrict the places allowed for religious activities. However, it was also obvious that there are some people who try to create new religious meeting places and to see secular world itself as an religious cultivation places. The study indicates there exists new style of religiosity and its places in Contemporary China.

研究分野：宗教人類学

キーワード：場所 アニミズム スピリチュアリティ 中国 日本

1. 研究開始当初の背景

筆者が調査している中華人民共和国は共産主義を標榜し、宗教には否定的であったが、近年では政治的な観点から社会秩序の維持や観光業促進のため、以前よりも宗教活動を容認する傾向にある。筆者が長期にわたって文化人類学的な調査を行なっている雲南省徳宏州芒市ではタイ族や漢族が共住し、上座仏教や大乘仏教、精霊信仰などがもともと存在していたが、最近では近代的建築に仏教寺院的な意匠が応用されたり、一時期厳しく取り締まられていたシャーマンの活動などが活発化したりするなどの現象が生じている。また、民間芸能である徳宏タイ劇は、近年「無形文化財」の概念が輸入されると同時に注目を集めているが、その演目にはジャータカやタイ族の神話など、宗教的テーマが多く取り上げられている。現在進行している宗教に関するこうした変化がどのような性質のものであり、中国、ひいては東アジアに住むわれわれの生活にとってどのような意味を持つのかを見極めることが、当初の研究の意図であった。

特に注目したのは、「場所」と「もの」のあり方の変容である。中国は宗教を管理するために宗教活動場所を限定する政策を取っているが、シャーマンの集会や近年増えてきた仏教徒の集会が信者の自宅で行われていること、政府系の建物に仏教寺院の意匠を用いることが明確には政治問題化しないこと、精霊が宿るとされた祠や樹木の移転をめぐる人々がさまざまな反応を示していることなどから、霊の宿り方や宿る場所についての考え方のなかに、近年の変化の本質が現われていると予想されたからである。

またこの研究では、「場所」と「もの」をめぐる考察をより深めるために、筆者の地元福岡市の今津人形芝居をサブフィールド的な事例研究の一つとして組み込むことにした。今津人形芝居は福岡県の無形民俗文化財であり、神社の境内で上演されていたものが、近年では地域の公共施設で上演されるようになってきている。この事例を、近年やはり中国で非物質文化遺産として認知された徳宏タイ劇のあり方と対比することで、この研究を中国の一地方の研究に留まらない普遍性を持つものにしようと考えたのである。

最後に、こうした事例研究を理論的にまとめるための柱として、アニミズム論についての考察を行なうこととした。2009年に発表した論文『「アニミズム」...』において、アニミズム論のレビューと再解釈を試みた際、この概念が西洋的な発想で定義されており、現代のおよび日本の立場から再考の余地があると感じた。こうしたことから、いくつかの事例研究を同時に進めながら、現代的な文脈において、アニミズムを中心とした宗教学の基本的な概念の再検討を行なう研究を計画した。

2. 研究の目的

近代社会は、「もの」や「場所」に霊が宿るという発想を迷信と見なす傾向が強い。しかし、環境問題におけるアニミズム論の復権、パワースポットの流行などの現象を見ると、現代の人々は「もの」や「場所」に「霊」を感じとる能力を、実は欲しているようにも見える。一体どのような文脈において、こうした感覚が再評価されているのか。単に過去の遺物と見なされている「アニミズム」を、現代的な観点から再定義する必要があるのではないか。本研究は、中国と日本の事例研究を通して、現代的状況において「もの」や「場所」の霊性が生成するメカニズムの解明を目指す。

3. 研究の方法

調査地において興味深い「もの」や「場所」をいくつか事例として取り上げ、様々な立場でそれらに関わる人々（例えば、村の寺院なら、村人、村長、僧侶、建築会社など）が、それらにどのような特別な意味を見出しているかを、インタビューやアンケート、参与観察などで調査する。同時に、従来のアニミズム論のほか、フェティシズム論や聖地論などの先行研究を整理し、その説明様式や理論の妥当性を、調査結果と照らし合わせて吟味する。具体事例の候補は、A. 徳宏タイ劇の「劇神」と「舞台」、B. 今津人形芝居の「人形」と「舞台」、C. 徳宏上座仏教の「仏像」と「上座仏教寺院」、D. 「聖遺物（仏舎利）」と「仏塔」、E. 「観音像」と「観音寺」、F. 「シャーマン」と「シャーマンの集会」である。これら個別の具体事例研究の結果を踏まえて、アニミズムと聖地を総合的に論じる理論的考察を試みる。

4. 研究成果

A. 徳宏タイ劇の「劇神」と「舞台」

徳宏タイ劇については、書籍『シャンムーン』（2014年）で、その歴史と現在の上演状況、重要な戯曲である「シャンムーン」の翻訳と解説をまとめることができた。徳宏タイ劇はシャーマンの歌や本生譚などの古くからあった要素が19世紀後半大量に流入した漢族移民の影響をうけながら、徳宏タイ族の人々によって近代的な演劇へと作り上げられたものである。形成当初の徳宏タイ劇には、政治的な側面と宗教的な側面が見られる。政治的な側面としては、徳宏タイ劇の形成期が清末から中華民国期にかけての激動期であったため、軍の慰労と鼓舞、政治宣伝などが上演の目的となりやすかったことが挙げられる。宗教的な側面としては、徳宏タイ劇が上演される際には「劇神」と呼ばれる神が招かれていたらしいことである。劇神についてはもっと詳しく調査したかったが、現在そうした行事がほとんど行われなくなっていること、複数のインフォーマントの言うことが

ばらばらで、どの見解が真実に近いのか、判断できないことなどから、十分な調査ができなかった。

新中国成立後は共産主義の思想的影響を受け、政治宣伝を主目的とする上演が一層多くなった。上演形態においても、当時進歩的な演劇と考えられていた京劇や西洋演劇の手法がさかんに取り入れられた。徳宏タイ族らしい表現方法や物語が本格的に重視されるようになったのは、むしろ改革開放以後であった。上演場所は寺の境内にしつらえられた舞台であることが多いが、近年は観光客向けに行われる町の広場などでの大掛かりな上演も増えている。戯曲「シャンムーン」は近代の徳宏タイ劇が成立する最初期から存在しており、その上演のされ方や内容についての評価が時代の変遷を如実に反映しているため、これを柱として上記のような徳宏タイ劇史を記述した。現在、徳宏タイ劇は徳宏の非物質文化遺産として、また観光資源として発展していくことが期待されている。

B. 今津人形芝居の「人形」と「舞台」

今津人形芝居については、『新修福岡市民俗編二 ひとと人々』で、「人形芝居と人々」(2916年)として成果を発表することができた。

今津人形芝居は江戸時代後期に淡路系の人形芝居が大分中津を経て今津に伝わり、現在まで続いているものである。明治後半から大正期には農漁村での娯楽として活況を呈していたが、太平洋戦争によって一時中断した。戦後まもなく復活し、近隣の農漁村でも上演していたが、60年代ごろから娯楽の多様化、農村の生活様式の変化などによって徐々に下火となった。1970年代と1990年代に子供たちへの伝統教育に取り入れる形で榎入れを図り、現在に至っている。かつては純粋に「娯楽」として浄瑠璃語りを趣味とする人々がたくさんおり、結婚式などの人生の節目に自宅に人形芝居を呼ぶといった形でも上演されていたが、やがて人形浄瑠璃は敷居の高い伝統文化と見なされるようになり、「教育」のコンテンツとして公共の施設で上演されるのが普通になった。かつて農漁村の野舞台上で上演するときは豊作・豊漁祈願の神事として、あるいは上演の際の当然の手續として、三番叟を最初に披露する習わしがあったが、近年では省略されることも多くなっている。上演場所についても、かつては個人宅や村の広場、漁網置き場など、いろんな場所が即席の舞台になることができたが、やがて神社の境内や小学校の校庭など、公共の場所にほぼ限定されるようになり、現在では地域の公共施設での上演が定着しつつある。

この変容過程は、娯楽や神事のための舞台が村の中に臨機応変に出現できていたのが、公共施設という特定の場所に限定され、そこにふさわしい教育的な内容だけが許容

される傾向にあることを示していると言える。

C. 徳宏上座仏教の「仏像」と「上座仏教寺院」

これについては、「作為観光資源的宗教建築：關於雲南省徳宏州芒市傣族南伝上座部仏教的考察」『西南辺疆民族研究』(2012)「観光資源化する上座仏教建築：雲南省徳宏州芒市の景観変容の中で」(2014、中国語)という二本の論文にまとめることができた。

徳宏の上座仏教寺院については、三つの変化を指摘できる。まず、都市部の主要寺院は観光文化資源と見なされるようになり、近年世界的に影響を及ぼしつつあるユネスコの世界遺産の考え方が適用され、修理や再建の際には原型を大きく変えてはならないと考えられるようになった。ただし、それによって信者がもっと理想的な建築様式への変更を望んでも実現できなくなったり、信者ではない観光客の出入りが増えて厳かな宗教的雰囲気損なわれるなどの問題が生じている。仏像の姿についても、上座仏教の基準に照らして標準的なものにするか、徳宏ならではのユニークなものにするほうがいいかが議論されている。

次に、農村の寺院には原型保持の文化政策が適用されないため、村人が現在の流行を取り入れて比較的自由的なデザインで寺を建設・再建する傾向がある。これは経済発展によって村としての見栄えをよくするために他村と張り合おうとしている面もあるが、その時代に最善・最新と思われる様式で寺院を常に作り変えていくことが功德になるという、徳宏タイ族にとっては自然な態度が経済発展によって少々誇張された結果とも言える。

最後に、仏教建築の様式が徳宏州の特徴を表すと見なされ、政府機関や公共の建造物などに流用されるといったことが起こっている。徳宏タイ族の人々は、表立って反対することはあまりないが、過度に近代化したり、徳宏タイというよりタイ王国的にアレンジされたりした建築物に対してあまり愛着が持てない様子であった。特に、近年ある娯楽施設会社が政府の支援を得て建てた金剛仏塔は、スリランカ風の意匠を取り入れ、ミャンマーの大工を雇い、大乘仏教の仏も祀るという混淆的な仕様で物議をかもした。

D. 「聖遺物(仏舎利)」と「仏塔」

これについては、当科研に応募していた2010年度中に多くの調査を行い、自分が考えていたよりも早く、2011年3月に「仏塔のある風景 雲南省徳宏州における宗教観光」『中国 21』という形で成果を出してしまった。当科研のなかで補足調査を行い、できればその続きを書くことも考えたが、

結果的に実現しなかった。ただ、現代における仏塔及び墓石の存在意義を考えることは、葬送儀礼のあり方が日本でも中国でも大きく変わりつつある現在、重要な課題であると認識しており、当科研で関連書籍や資料を購入するなど、調査自体は継続して行なっていた。

E. 「観音像」と「観音寺」

これについては、「現代中国の宗教文化と社会主義」(2015)に成果をまとめることができた。徳宏州の観音信仰については三つの特徴が確認できた。一つは地元タイ族の一部に広がる古い民間信仰としての観音信仰である。この観音信仰では観音に関する民間伝承がタイ語で記述されるなどすでに古くから土着化していたことが伺われる。ただしその伝承は一部の村に限られている。二つ目は地元のタイ族と漢族が共有できる民間信仰としての側面である。これは19世紀末以降の、比較的最近広まってきたものと思われ、漢語による経典と儀式に基づいて、観音寺で実践されている。小さな観音像を自宅に置いたり、観音の刺繍を寄進したりといった行為が民族の別を問わず、都市部で流行している。第三に、観音寺の信者のネットワークを通じて一部にスピリチュアル運動やチベット仏教の知識が流通していることである。年季の入った信者は、民間信仰的な慣習では物足りなくなり、そうしたより専門的な知識を取り込もうとするのである。その背景にはインターネットの普及によって以前よりずっと簡単に仏教の専門知識に触れられるようになったこと、唯物論教育を受けてきたがゆえに却ってそうした神秘的な思想に魅力を感じやすくなっていることなどが考えられる。こうした信者は決められた宗教活動場所での活動を陳腐なものと思わず、家庭集会やインターネットで仏教を学ぼうとする。そして日常生活そのものを修行の場と思わず、日常に宗教的な意味づけをしながら生活するようになる。

このように観音信仰はいくつかの層を成しており、それぞれの層において特徴的な信仰の場を形成することが分かる。

F. 「シャーマン」と「シャーマンの集会」者

これについては、シャーマンの集会自体が不定期開催で、調査期間中にほとんど実質的な調査できなかつたこと、調べてみると調査結果の公開を拒まれることが多かったこと、他の事例研究のほうが当初の予定よりも時間がかかったことなどから、今回は重点的な調査を行わないことにした。

まとめ

以上のような事例研究から見えてきたのは、宗教活動を行なえる場所や聖なる場所を

政治的な力が特定の場所に限定しようとする一方、宗教的な力は限定された場所からはみ出し、日常的な世俗世界の中に滲みだそうとしているのではないかということである。特に中国の観音寺の事例はそのことが顕著に表れている。すなわち、宗教活動場所が行政によって限定されることによって、皮肉にもその場所は真の宗教活動ができる場所とは見做さない人々が現われ、家庭集会を開いたり、ネット上で行われる説法と個人的に向き合ったりするようになるのである。科学研究の成果としては扱わなかったが、仏塔の事例では、行政や観光業者が仏塔を自然景観の一部と見なすことでその場所を脱宗教化して観光資源化しようとするのに対し、環境保護主義のなかにアニミズム思想が混じることによって自然そのものに聖性が感じられるという語り生まれ、結局新たな文脈で聖化が起こるという現象も見られた。

これに対し、タイ劇と今津人形芝居の事例は、予想とはやや異なる結果となったが、それなりに十分興味深い示唆が得られたように思う。まず、予想と異なつたのは、両者とも思ったほど宗教的な要素は強くなく、どちらかといえば娯楽活動であったこと、そしていわゆる宗教的要素は時代が下るにつれていっそう薄れつつあるということである。しかし、娯楽という現象は、それはそれで宗教について考えるのによい参考となる部分があった。つまり、娯楽も宗教と同じく、非生産的な活動として公的には制限される一方、思いがけない形で日常生活の中に再び回帰するという現象が見られたのである。具体的には、徳宏タイ劇が観光資源化し、行政の手が入り、公的な舞台で政治的に当たり障りのない演目が上演されるようになる一方で、一部の人が仏教的な内容のタイ劇を野原や山中で上演し、それをDVDに録画して、貸借や売買で個人的に楽しむということが行われていた。そこでは上演前に劇神を祀るといった宗教性は失われているが、人々の間で人気の高い宗教的な物語が劇化されてより身近なものになっているとも言えるのである。その点で言うと、今津人形芝居は活動資金を公的支援に頼る度合いが大きくなるにつれて、子供たちの人権教育に資するような演目の上演を推奨されたり、専門の公的施設で上演するのが望ましいとされたり、活動場所についても内容についても公的な制限が強まっていく過程にある。しかも人形芝居は伝統芸能であるという観念が強いため、内容や上演形式を自由に变化させにくく、特に若い世代が純粋な娯楽として楽しめなくなりつつある。娯楽性をとりもどすような新たな変化がどのように起こるのか、それともそれとは違う道筋をたどるのか、継続的な調査が必要である。

本研究では、こうした各事例研究の成果をもとに、アニミズム論の現代的な見直しを行う予定であったが、アニミズム関連の研究お

よび各事例研究に予想以上に時間がかかり、総合的な見直しを成果にまとめることはできなかった。特に、アニミズム論の原点であるタイラー『原始文化』の翻訳が現時点でも終えられなかったのは大きな誤算であった。今後はできるだけ早く翻訳作業を終え、本科研の研究期間に得た知見を加えて総合的な考察を行ない、成果としてまとめることに尽力したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

長谷千代子(単著)2016年3月「人形芝居と人々」『新修福岡市史 民俗編二 ひとと人々』福岡市発行、187～220ページ。

長谷千代子(単著)2015年3月「現代中国の宗教文化と社会主義」『アジアの社会参加仏教：政教関係の視座から』櫻井義秀・外川昌彦・矢野秀武編著、105-126ページ。

長谷千代子(単著)2014年3月「観光資源化する上座仏教建築：雲南省徳宏州芒市の景観変容の中で」『中国の民族文化資源：南部地域の分析から』武内房司・塚田誠之編、風響社、307～330ページ。

長谷千代子(単著)2013年1月「宗教文化」と現代中国：雲南省徳宏州における少数民族文化の観光資源化」『現代中国の宗教：信仰と社会をめぐる民族誌』川口幸大、瀬川昌久編 昭和堂、20～44ページ。

長谷千代子(単著)2012年10月「作為観光資源の宗教建築：關於雲南省徳宏州芒市傣族南伝上座部仏教的考察」『西南边疆民族研究』第10輯、31～39ページ。

〔学会発表〕(計 7 件)

Chiyoko Nagatani, 2015.8.23. 'New Buddhism for Chinese Local City Dwellers', International Association for the History of Religions (IAHR), 21th Congress, in Erfurt University, Germany.

Chiyoko Nagatani, 2014.5.15. 'An Analysis on Guanyin Cult as "Sinicization" in a Multi-ethnic Area of Contemporary China: from the viewpoint of "ortho-syncretism"', The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES), 2014 Congress, Makuhari Messe, Japan.

長谷千代子(コーディネーター) 2013年10月26日 セッション「出来事と人々が織りなすもの」(発表者：関一敏、後藤

晴子、内藤順子、川田牧人、長谷千代子)
「今津人形芝居の舞台はいかに成立するか：遊び・文化・教育」(個人発表)九州人類学研究会オータム・セミナー、基山町民会館

長谷千代子 2013年3月31日「中国雲南省における宗教説話と演劇：徳宏タイ劇に関する報告」西日本宗教学会第三回学術研究大会、九州大学

長谷千代子 2012年7月28日「中国における社会主義精神文明の建設と宗教文化の再評価」比較文明学会九州支部第46回研究会、香蘭女子短期大学

長谷千代子 2012年6月23日「雲南省徳宏州における「宗教文化」と日常実践」日本文化人類学会第46回研究大会、広島大学

長谷千代子 2011年10月29日「場所性から考えるアニミズム試論」九州人類学研究会オータム・セミナー、国民宿舎響。

〔図書〕(計 1 件)

長谷千代子訳著・岳小保共訳 2014年3月『シャンムーン：雲南省・徳宏タイ劇の世界』雄山閣、全192ページ。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

長谷千代子(Nagatani, Chiyoko)

九州大学・大学院比較社会文化研究院・准教授

研究者番号：20450207